



留学経験者インタビュー

山田 光子先生（藤田医科大学医学部整形外科）

1. 留学先はどちらですか？

場所 フランス、トゥールーズ市

施設名 Hôpital Purpan

2. 期間

2年間 2001年～2003年

3. 卒後何年目でしたか？

卒後15年

4. 留学を目指したきっかけ

大学卒業時、日本にいただけでは得られるものが限られると感じ、機会があれば海外留学をしたいと思っていました。大学の医局に入って仕事を始めると、卒後プログラムを消化したり、自分なりの目標ができて海外留学は薄らいでいく時もありました。しかし医局内に海外留学をされる先輩がおられ、体験を聞かせていただくことで、留学する決意が固まりました。そして、留学2年前頃先輩の先生に留学先を紹介していただき、自分が専門としていた肩関節疾患の勉強のため Prof. Mansat が勤務される Hôpital Purpan に私費留学することになりました。このようなことですので、医局から研究課題を与えられたり、留学前から具体的な研究の目的を持ったの留学ではありませんでした。

5. 留学に際しての公的援助、給与

休職の身分で留学したので、休職者としての給与が大学から支給されました。

6. 留守中における準備

1年前に上司、教授に留学許可願いを提出しました。

実務については大学勤務中の留学だったので、留学前に私の役割を担ってくれる医師に仕引継ぎができました。

7. 留学先での経験

Hôpital Purpan は日本の大学病院にあたる病院で慢性疾患から外傷まで行っていました。私が許されたのは教授の許可範囲内の手術、外来診察の助手、および研究の機会をいただきました。Prof. Mansat は肩関節、上肢が専門で、Dr. Neer が師匠、当時の東海大学の福田宏明教授を日本の兄弟と言われていました。肩関節の手術では当時は日本でまだ少なかった人工肩関節を日常的に見ることができ、肩関節不安定症に対する Capsular shift、腱板断裂、肩関節脱臼等の手術の助手に多数入ることができました。研究では工学部の先生方に助けていただき、上腕骨頭の CT 画像から骨質を検討するという研究ができ、日本に戻って学位論文とし、SOFcot と International congress shoulder and elbow surgery で発表の機会を得ました。

また他施設の訪問も許可が得られ、リヨンの Dr. Walch の病院に2ヶ月滞在させていただきました。そこでは

reverse shoulder arthroplasty や Latarjet 法の手術を助手として参加し指導していただきました。
SOFcot, ESSSE などの学会に参加する機会もありフランス、欧米の著名な整形外科医の講演を聞く機会がありました。

8. 留学先での苦労、経験、学んだこと

留学前に Pr. Mansat と会い、フランス語は話せないが留学可能かを確認したところ、問題ないとの返事でしたが、臨床の場ではフランス語が理解できないと会話についていけなかったこと（留学開始約 1 週間後に教授から、「フランス語を話すように。」と言われて驚きました）。

また与えられた実験が予定のように進まず、当初 1 年の留学予定が 2 年になりました。しかし振り返ると 2 年目で得られたことが大きかったので、この延長は私にとってはありがたいものでした。

フランスでは給料明細がないと部屋が借りられないので、病院の研修医や留学生のための寮に滞在しました。留学生は多彩で、一番驚いたのは以前植民地であった北アフリカ諸国からが多数で、さらに中東、イタリア、スペイン、ドイツ、ブラジル、アジアではベトナム、カンボジア、中国などの留学生が寮で生活をしていました。日本ではなかなか話をするのがない国の人と話ができたことは寮ならではの経験だと思いました。留学前に持っていたフランスのイメージと現実はかなり異なっていたので、何でも実際に体験しないと理解できないことはたくさんあると実感しました。

留学によりフランスを知ることで、日本の長所、短所も再発見できました。さらにフランス人の働き方や考え方に触れて、今までより仕事のやりかたに幅ができました。

9. 帰国後の職場復帰について

大学に戻るようにはしていただきました。

2 年留学したので、その間に私の役割の仕事は補ってもらえていたので、復帰当初は仕事量が少なく戸惑いがありました。次年度現在の職場に移動となり、新しい場所で仕事を開始できる環境になれました。

10. 留学経験はキャリアに影響したか？

先に述べたように、留学での実験が学位論文となりそれが基になって現在の職位につくことができました。またフランスでの仕事の仕方や日本では参加できない学会、講習会から刺激を受け整形外科医の理想像が形成されました。

11. メッセージ

昨年コロナ禍により様々な変化があり、インターネットで海外の多くのことが手に入れられたり、オンラインで参加が可能になったり、国内で可能なことが増大しています。海外に行く必要性が限られ、医局等からの要請、派遣以外では留学するというモチベーションを持つことが薄れてくる時代かもしれません。日本の医療、整形外科は海外と遜色のないものですが、日本国内で得られる視野は限られます。海外での体験は整形外科の仕事だけではなく、日常生活でも新たなものの見え方、考え方が得られる機会です。留学は自分の意志だけでは実現できませんので、周囲の理解、援助が得られるように努力することも必要だと思います。

最後に留學生活は日本で味わえない、楽しみ、喜び、驚きに満ちています。留学したいという気持ちがあるのであれば、悔いのないよう実行することをお勧めします。